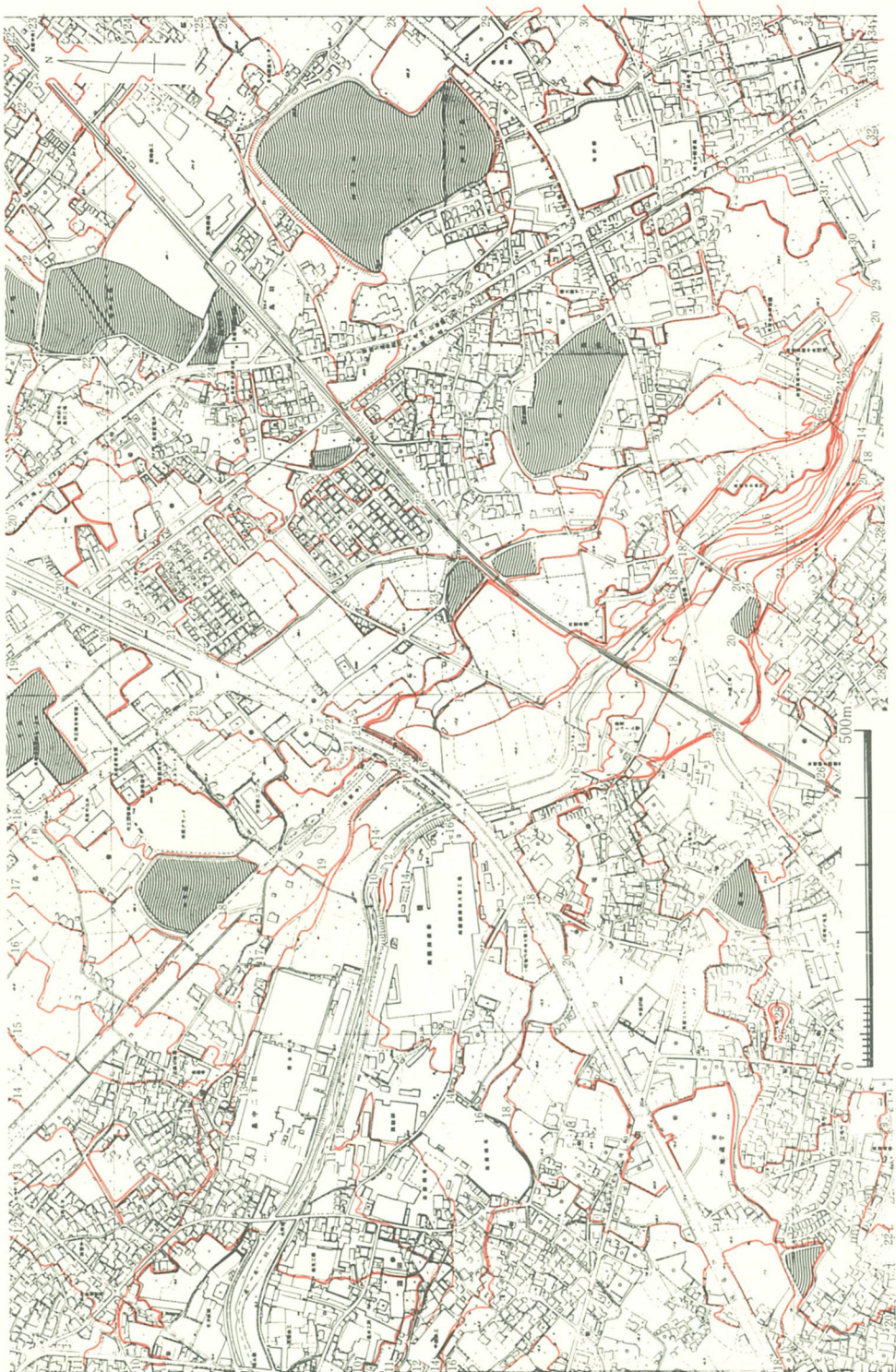
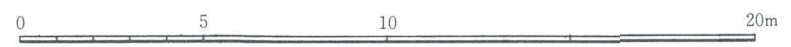
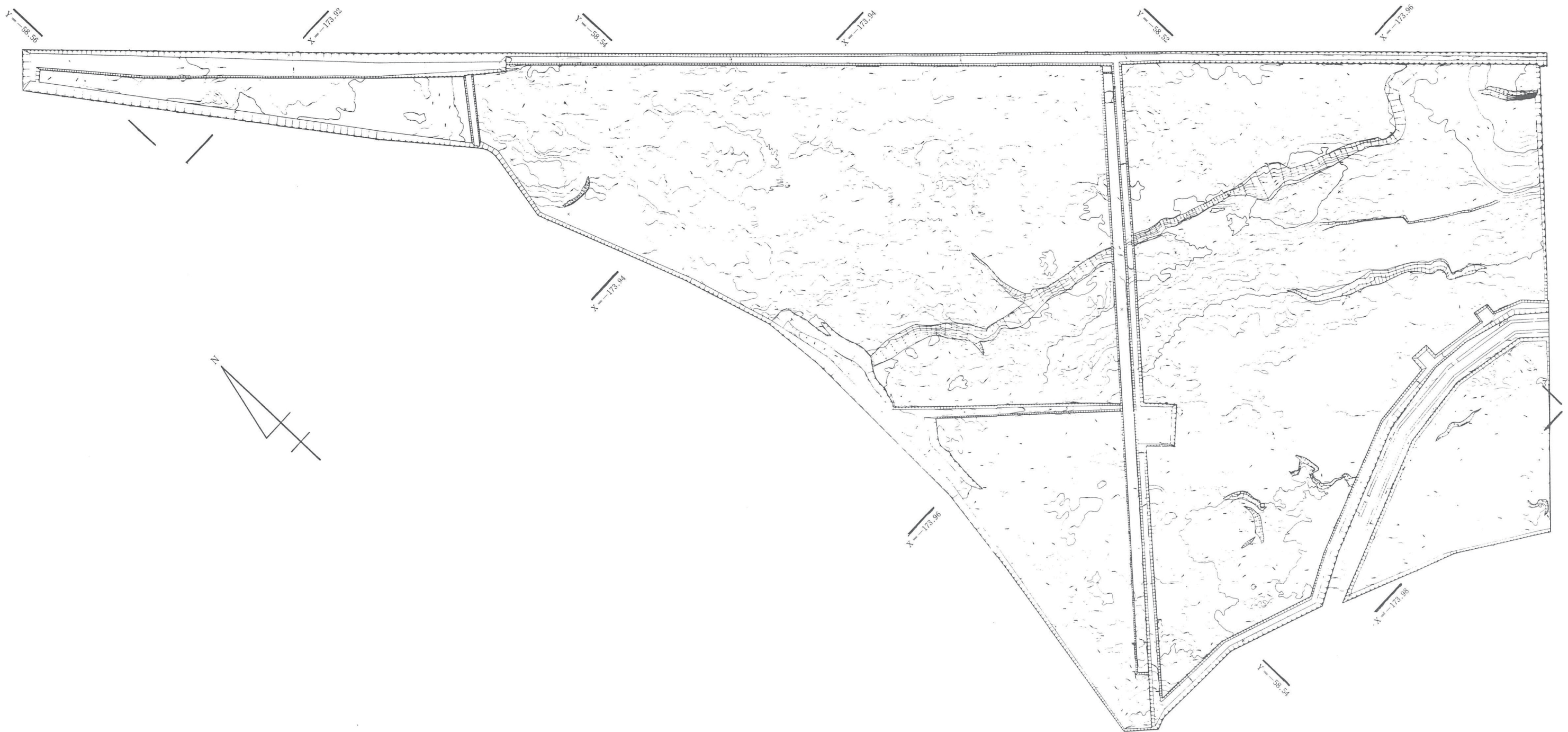


第 7 図 砂礫層上面検出平面図 (10-O R)



第 8 図 調査地周辺等高線図





第9図 調査区全体図 (I)





第10図 調査区全体図 (II)



## 第4節 遺物

### 包含層出土の遺物（第11・12図、図版4・5）

今回の調査で出土した遺物は遺構に伴なって出土したものでなく、すべて包含層内より出土したものである。遺物はいずれも細片である。内容は土師器、須恵器、施釉陶器、磁器、瓦器、瓦（軒丸瓦、軒平瓦）、石製品（石器、剝片）などが出土した。以下に図化したものを示す。

（1～4）は瓦器碗である。（1）は復元口径14cm、器高5cmを測る。磨滅が著しいが、内面底部に格子状の暗文、外面には指圧痕の痕跡を認めた。（2）は復元口径14.8cm、器高5cmを測る。内面は磨滅が著しく、調整不明。外面には3段の指圧痕が残る。（3）は復元口径13.7cm、器高4.7cmを測る。口縁部外面は強いヨコナデで仕上げ、外側面は4段の指圧痕が残る。内底部には平行線暗文を施し、細い高台が丁寧に張り付けられている。

（4）は復元口径11.8cmを測る。内外面とも磨滅が著しいが、内面に平行線暗文が残っている。（5・6）は瓦器皿である。（5）は復元口径11.2cm、器高3cmを測る。外面には指圧痕が残る。内面は調整不明。（6）は復元口径9.8cmを測る。内面に平行線暗文が残る。（7）は瓦器の小碗である。復元口径7.4cmを測る。（8～13）は土師小皿である。体部を1段のヨコナデで調整、口縁端部は丸い。（8～12）は復元口径7cm前後を測る。（13）は復元口径9.7cm、器高1.5cmを測る。

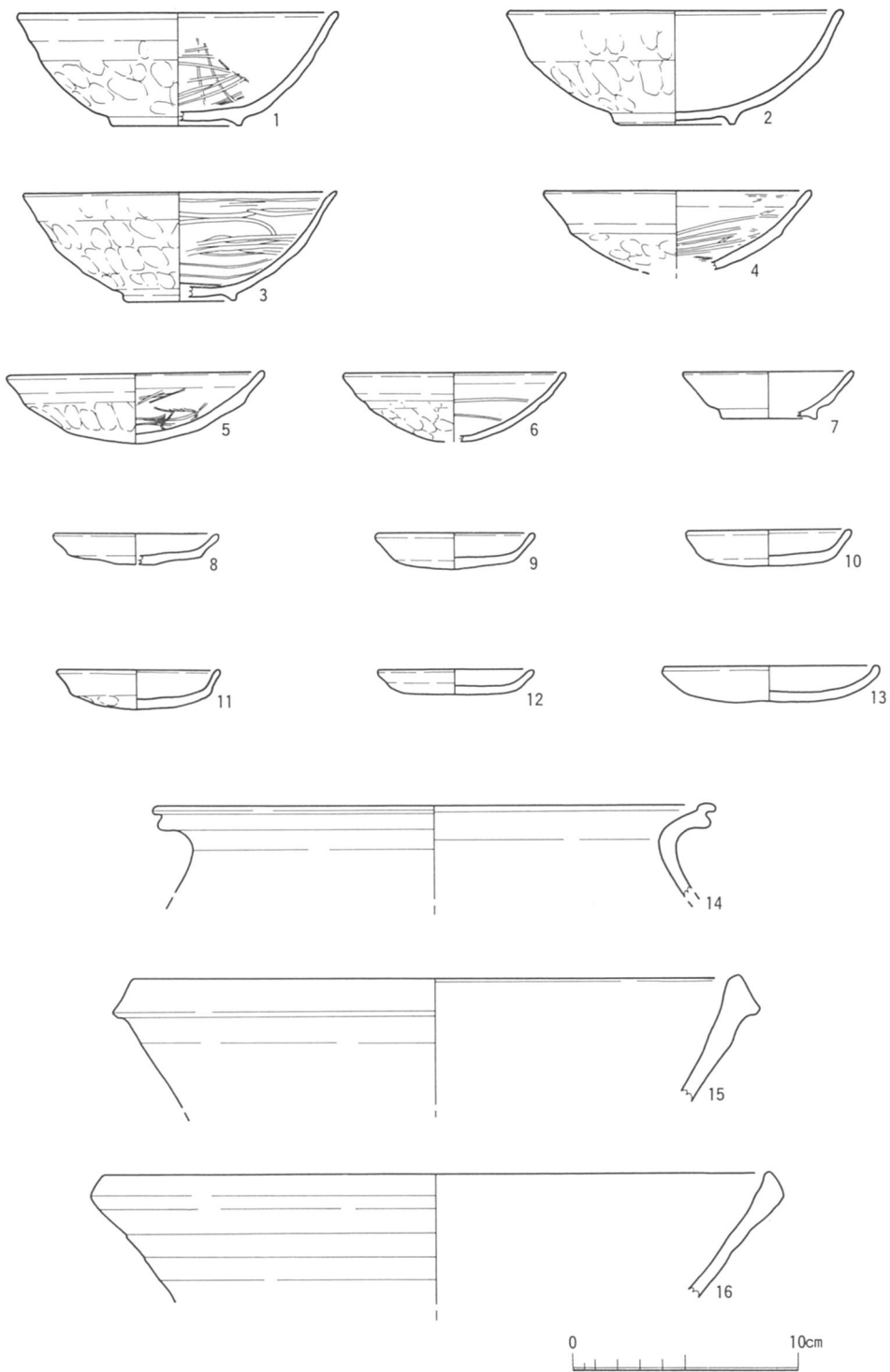
（14）は土師質土鍋である。口縁部だけの破片である。復元口径24cmを測る。

（15・16・19）は東播系の須恵質こね鉢である。いずれも口縁部外側に自然釉がかかり、黒褐色に発色している。（15）は復元口径26.4cm、（16）は29cmを測る。胎土はいずれも密である。

（17）は青磁碗の底部である。高台径2.7cmを測る。磁胎は精良で7.5YR5/2（灰褐）を呈し、釉は5G7/1（明緑灰）を呈する。内面見込みに印花文をもつ。釉は高台外側面まで施釉し、高台端面より内側は露胎である。龍泉窯系と思われる。（18）は天目茶碗である。黒釉を内面から外面体部下半まで施し、体部下半より高台にかけては施釉されておらず露胎である。美濃・瀬戸系のもと思われる。（20）は常滑焼の甕と思われる。

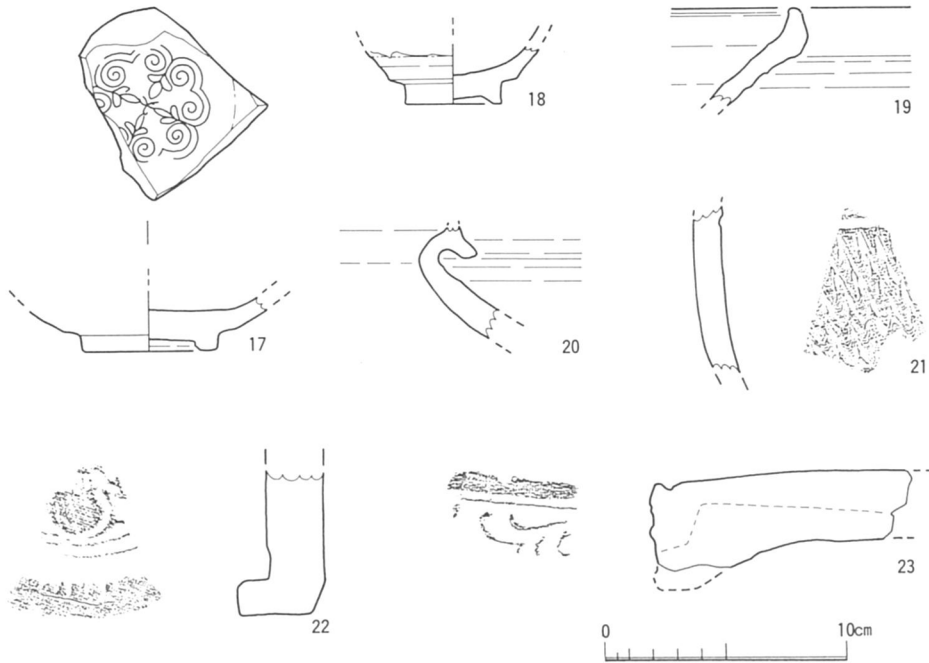
（21）は須恵器の器台である。外面には幅の狭い波状文様帯を数段もつ。逆三角形のスカシをもつと思われる。

（22）は軒丸瓦で周円部が高い。磨滅が著しく観察難であるが、瓦当文様は蓮華文を描



第11図 包含層出土遺物 (I)





第12図 包含層出土遺物 (II)

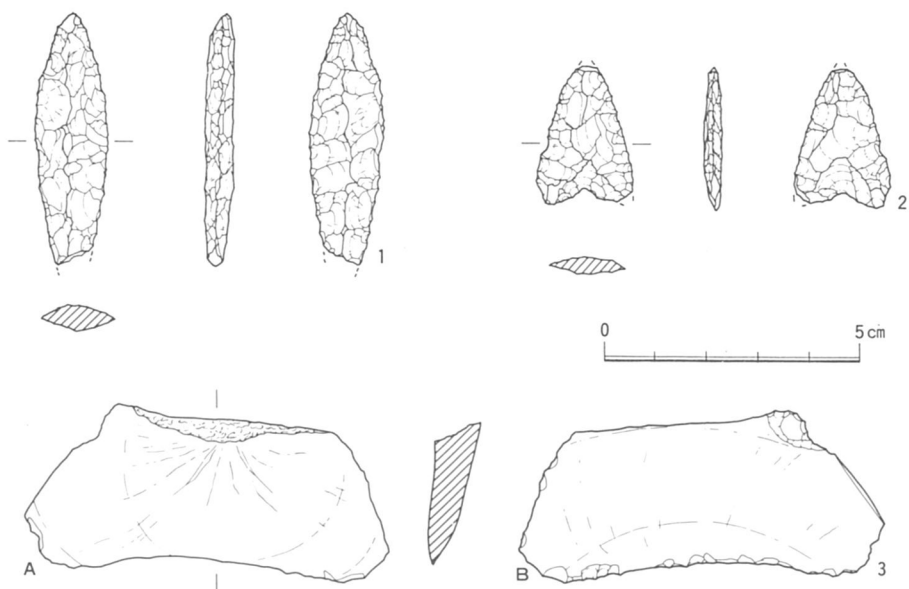
くものと思われる。焼成はやや悪く、胎土は軟質である。復元直径は12.6cmを測る。(23)は軒平瓦である。残存長10.8cmを測る。磨滅が著しく観察難であるが圏線によって内区と外区を区画し、内区に唐草文の一種と思われるものを描く。焼成は悪く、胎土は軟質である。また、厚いつくりである。

#### 包含層出土の石器 (第13図、図版5)

今回の発掘調査で検出した石器は以下の3点である。他に剥片が数点あるが、出土遺物の総数量からみれば石器・剥片の出土量はわずかなものであった。なお、出土した石器・剥片はいずれもサヌカイト製である。

1. 基部を欠損しているが尖頭器で弥生時代のものと思われる。比較的丁寧な調整剥離を両面から加えているのが認められる。残存器長4.82cm、器幅1.4cm、最大器厚0.56cm、重さ4.18gを測る。

2. 両端を欠損しているが凹基無茎石鏃で弥生時代のものと思われる。比較的丁寧な急角度の調整剥離を両面から加えているのが認められる。残存器長2.57cm、器幅1.81cm、最大器厚0.32cm、重さ1.58gを測る。



第13図 包含層出土遺物 (III)

3. A両側に原礫面を残す横長剥片である。自然のものかもしれないが、B面の下端に2次調整と思われる若干の小剥離が見られる。長さ2.8cm、幅7cm、厚さ0.82cm、重量13.9gを測る。



## 第Ⅳ章 まとめ

前章で述べてきたように、調査区は、中世以降、耕作地として利用されてきたことが判明した。

調査区の東方は、一段高く段丘状になっており、貝塚市石才、かつての石才村の集落が存在する。石才村は、中世近木庄に属し、中世以来の集落である。調査地は一段低く、集落の場としては不適當であったのであろう。

今回の調査では、中世以前の状況は明らかにすることはできなかった。中世以前の生活面としては、黄色粘土層が考えられる。ただ、黄色粘土層の上面は、砂礫層に大きく削剥されており、遺構が本来存在していたとしても、削平されてしまった可能性が高い。

今回出土した、中世以前に遡る遺物は少ないが、特に注目されるのは石鏃（第13図-1）である。石鏃は、調査区東南隅（大C-3-15-D01DG）の近世盛土層から出土した。

この地区は、一段高い段丘状になった地形の縁辺部にあたり、近世になって低い段の方へ拡張した場所にあたり、その際の盛土から出土したものである。盛土に使用した土は、近辺から採取したことは容易に想定される。したがって、石鏃が高い段丘上に存在していたとするならば、集落も中世以降と同様、現在の集落の箇所に立地していたとも考えられる。

しかし、仮定の上に仮定を重ねた上での論であり、何ら確証のないものである。

次に、黄色粘土層についてであるが、その<sup>14</sup>C年代から中位段丘上部に相当する可能性があることを記したが、その当否については周辺の地質学的調査が進捗すれば明らかになるであろう。

いずれにしても、今後、周辺の調査を重ねることによって得られる知見は大きく、橋本遺跡の実態も徐々に明らかになっていくであろう。

## 付章 昭和63年度の試掘調査

昭和63年度の試掘調査対象地は都市計画道路貝塚中央線建設予定地内のJR阪和線から大阪和泉・泉南線にかけての道路建設予定地内である。対象地の現状は東側が工場跡地、西側が旧水田地となっている。調査は旧耕作土及び盛土を機械掘削したのち、人力によって掘削した。人力掘削は層序の確認と層理面での遺構・遺物検出をおこない、遺構・遺物が検出されなかった場合順次掘り下げることにした。

なお、調査の便宜上、東側の調査区（工場跡地）をB地区、西側の調査区（旧水田地）をA地区と呼称した。

### A地区（1～4トレンチ）

この地区では東西4m、南北2mのトレンチを4ヶ所任意の位置に設定した（第14図）。

その結果、旧耕作土・床土・褐色系砂質土・暗褐色系砂礫層という基本的な層序が各トレンチにおいて確認された。いずれの層もほぼ水平堆積で、平均掘削深度は約1mである。

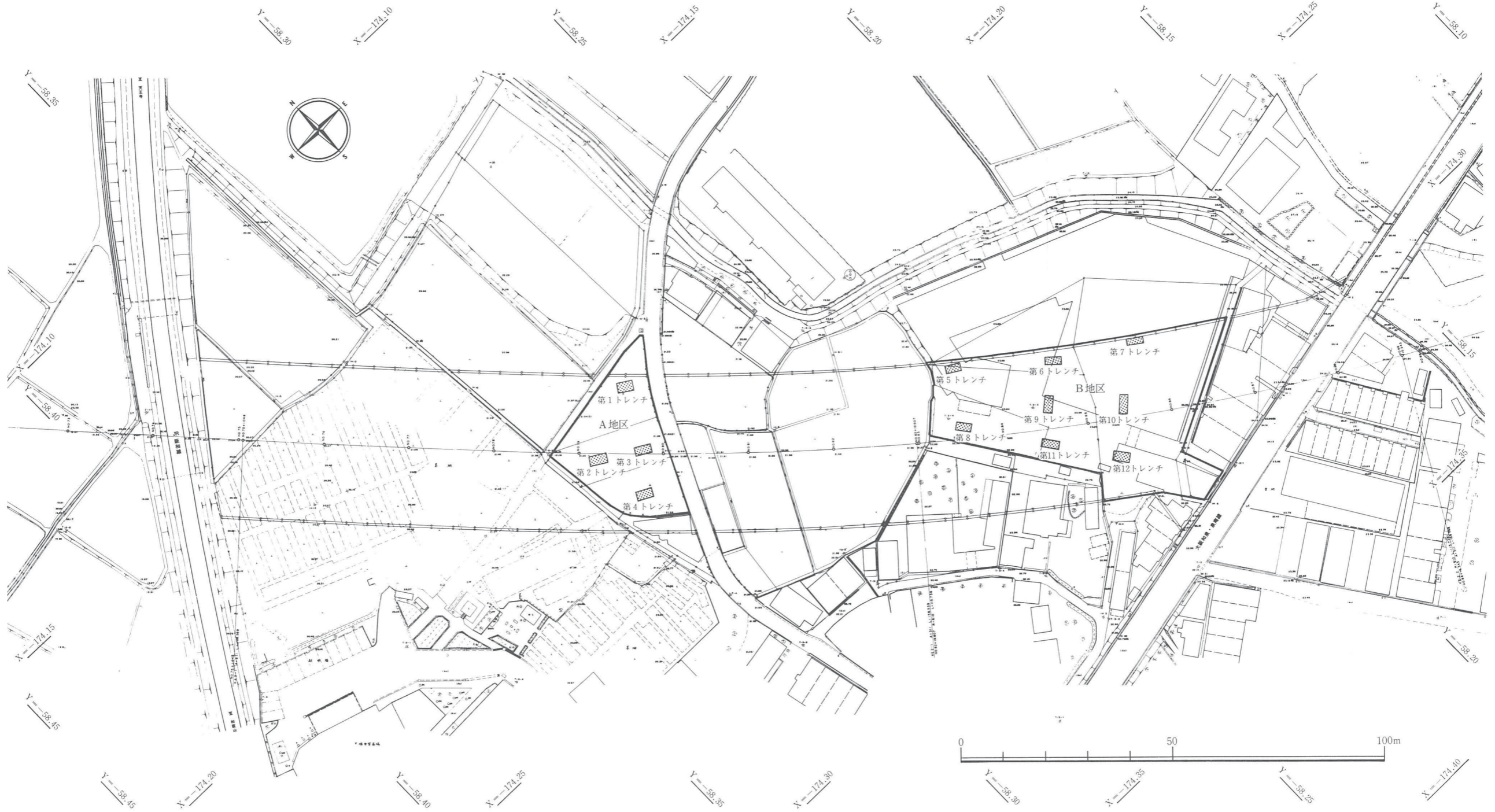
いずれのトレンチにおいても遺構は検出されなかったが、遺物は旧耕作土と砂礫層との間で土師器・須恵器・瓦器などの遺物が出土した。出土遺物はいずれもローリングを受けている細片であった。

### B地区（5～12トレンチ）

本調査区は大阪和泉・泉南線の西側に位置している。対象地の現状は工場跡地で、解体時の攪乱を著しく受けていた。この地区では計8ヶ所のトレンチを任意の位置に設定した（第14図）。その結果、盛土及び攪乱層の下に旧耕作土・褐色系粘土・褐色系砂礫層・褐色系砂層などがほぼ水平に堆積している。しかし、トレンチ7では砂礫層及び砂層が西～東に傾斜しながら堆積しており、また、トレンチ10では南～北に傾斜しながら砂礫層及び砂層が堆積している。各トレンチの掘削深度は1.5m前後で、最深部は現地表下2.4mまで掘削した。

遺構はいずれのトレンチからも検出されなかったが、6・10・11・12トレンチの砂礫層から土師器・須恵器など遺物が出土している。いずれの遺物も細片で出土量が少なかったため、この地区における砂礫層の堆積した年代を推測するのは困難であった。部分的な調査であるため詳細は不明であるが、砂礫層に含まれていた細砂等の観察から、砂礫層の堆積は流路等の自然堆積によるものではないかと思われる。





第14図 昭和63年度試掘調査の範囲と試掘坑の位置図

# 圖 版



橋本遺跡全景（航空写真）



橋本遺跡全景（南東より）





第1トレンチ全景（東より）



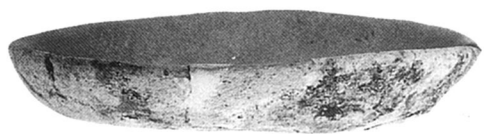
第1トレンチ中央部断面（南より）



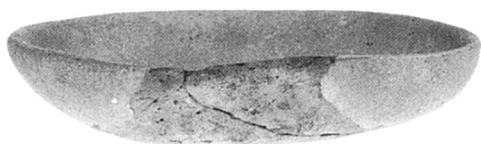
第2 トレンチ断面 (南より)



第5 トレンチ断面 (南より)



8



9



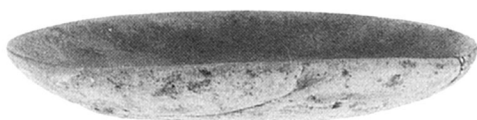
10



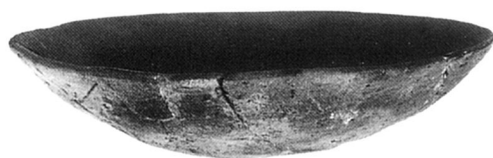
11



12



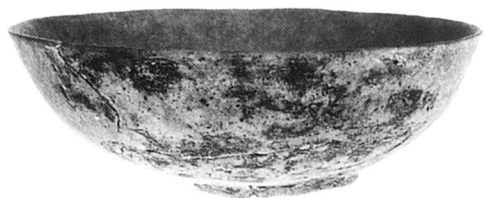
13



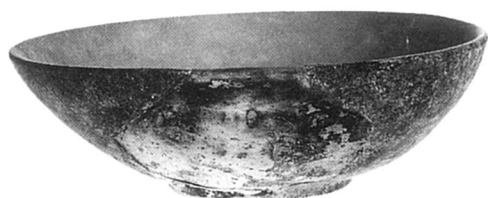
5



4



1



2



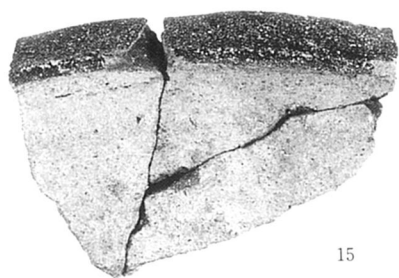
3



6

1~4. 瓦器碗 5・6. 瓦器皿 8~13. 土師器小皿

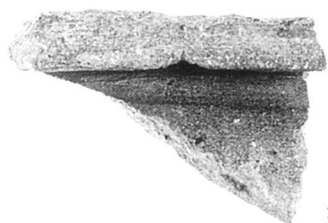




15



16



20



14



17



23



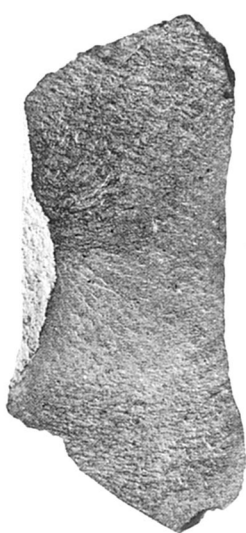
22



2



1



3

14. 土師器 土鍋 15・16. 須恵質 こね鉢 20. 常滑焼 甕 17. 磁器碗  
22. 軒丸瓦 23. 軒平瓦 1. 尖頭器 2. 石鏃 3. 横長剝片



昭和63年度試掘調査A地区全景（東から）



昭和63年度試掘調査B地区全景（東から）

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第30輯  
都市計画道路・貝塚中央線建設に伴う

# 橋 本 遺 跡

—発掘調査報告書—

昭和63年10月30日

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
大阪市東区谷町2丁目36番地大手前ウサミビル

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所